

第3回ようぼく一斉活動日

教区管内20カ所で開催



第663号

発行所

天理教静岡教務支庁

〒425-0013

焼津市岡当目1番地

TEL (054) 626-1333

FAX (054) 628-4615

Email:skyou@live.jp



亀玉会場



教区情報ねっとQR

第三回「ようぼく一斉活動日」(主催：教会本部)が十一月三日、四日の両日にわたって教区管内二十カ所で開催された。

三回目となった今回、各支部とも開会挨拶で趣旨とプログラムについて説明がなされ、お

つとめでは日頃お守り頂いてている親神様への御礼の意味を込め

つ、世界の治まりやそれぞれが取り組むおたすけの御守護を願

い、皆が年祭活動を精一杯つとめられるよう近

いと願いを込めてつとめた。そして「諭達拝読」、

教会本部からのメッセージのほか、会場ごとに、

教祖百四十年祭を目指

したようぼくの成人のきつかけにしてもらおうと「講話」「おつとめ勉強」「おさづけの取り次ぎ」「ひのきしんの実行」など工夫を凝らして独自プログラムを行った。最後に閉

講挨拶で三年千日の年祭活動仕上げの年に向かう今、自分でできるにをいがけやおたすけはないか、考えてみよう」と訴え閉会した。

それぞれ開催された。今回支部独自の内容として、「おさづけのお取り次ぎ」というテーマで行い、講師よりおさづけの理の尊い意味や、おさづけの具体的な取り次ぎ方、注意点などを事細かにお話頂き、銘々が改めて確認

したようぼくの成人のきつかけにしてもらおうと「講話」「おつとめ勉強」「おさづけの取り次ぎ」「ひのきしんの実行」など工夫を凝らして独自プログラムを行った。最後に閉講挨拶で三年千日の年祭活動仕上げの年に向かう今、自分でできるにをいがけやおたすけはないか、考えてみよう」と訴え閉会した。

今回も各支部・各会場での独自プログラムを紹介しながら、仕上げの年を共々に勇ませ合いながら精一杯つとめる契機としたい。

東伊豆支部

おさづけ

東伊豆支部では一組

(伊東、熱海)は三日

に伊東分教会で、翌四

日に下田分教会を会場



伊東会場



下田会場

し、おさづけに関する質疑応答を行い、解答はビデオを通して学ばせて頂いた。

その後、二人一組となり、身土者、取り次ぎ者に分かれ、真剣なおさづけが会場内のあるところで行われた。最後に、ようぼくの使命はたすけ一条にある事おたすけは親神様、教祖への一番のご恩報である事を確認し、年祭活動に一段と拍車をかけ、おたすけ活動に励む事を誓い合い、閉講となった。

伊豆支部

ひのきしん

伊豆支部では三日西浦分教会で、四日は北豆分教会でそれぞれ午後一時から開催した。独自プログラムとして、今回はひのきしんを実施。西浦会場では土肥海岸海水浴場と松原公園でゴミ拾いを、北豆分教会では教会の

神殿や境内地での掃除や除草などを行った。

その後、班ごとに分かれてフリートーク、親睦を深めつつ、年祭活動の仕上げに向かい、活発な意見交換が行われた。



西浦会場



北豆会場

駿豆支部

おさづけ てをどり

駿豆支部では、前回と同じく組ごとに佐野原大教会、嶽東大教会、楊原分教会では三日に沼津大教会では四日の計四会場で行われた。佐野原会場ではおさづけ勉強として「おさ



沼津会場



佐野原会場

づけの意義」と題して、教祖がどういった思いでおさづけをお渡し下さったのか等の講義。続く「おさづけ体験談」では、高田荘分教会前会長夫人杉山氏からの体験談を拝聴。そして「取り次ぎ方説明」では、取り次ぎ方の説明後、参加者同士に取り次ぎ合った。



嶽東会場



楊原会場

嶽東会場ではおさづけ勉強会として、諸井道隆山名大教会長のMOROチャンネルの中から「おさづけの有難さ」を視聴。碧空分の杉本恵美子さんの感話、おさづけ取り次ぎ説明を行い、一人一組になって取り次ぎ合いを横と縦のペアで二回行った。楊原会場では今回はおさづけの理について、より分かりやすくお伝えするために、プロジェクトを使っての勉強会を行った。沼津会場では、三日講習会補助教材を使い、おてふり練習の基本の手振りと座りづとめを中心にプロジェクトスクリーン使用して熱心に学んだ。



富士会場

富士支部

おつとめ

富士支部では今回は『三日講習会』のおてふり練習DVDをもとに座りづとめの基本練

東駿支部

感話

東駿支部では、興津分教会を会場に、「ともに歩もう ひながたを胸に」をテーマとし

て、谷渡晴樹さん、新貝ちはるさん、仁藤陽一さんの感話を聞かせて頂き、参加者が隣り合った人達と熱心に談笑する様子がかがえた。年祭活動に向け、陽気ぐらしへの実践を強く推し進めていくことを誓った。



興津会場

中駿東支部

おさづけ

中駿東支部では、静岡大教会を会場に十九人が参加した。

会場別プログラムは「おさづけ」をテーマに、おさづけの取り次ぎの基本をいま一度確認し、参加者全員で取り次ぎを行った。

続く質疑応答の時間では、さまざまな質問が飛び出し、講師の先生方も懇切丁寧に回答するなど、改めておさづけの理の大切さ、素晴らしさを実感した。参加者からは、「拝戴してから、初めておさづけを取り次いだ」「これから、もっとおさづけを取り次いでいきたい」などといった声が上がった。



静岡会場

中駿西支部

おさづけ

中駿西支部では、前回同様三会場にて開催された。今回の自主プ

ログラムではおさづけの取次ぎ方を勉強させていただいた。初めてお取り次ぎをされる方や、久しぶりにお取り



駿府会場



井川会場



安倍会場

うつ病などの精神疾患や様々な病氣、不登校やひきこもりなど、悩みを抱えた当事者や家族と向き合う中で、特に留意し大切に

次ぎをされる方が多く、取り次ぎを遠慮されるのではないかという心配をよそに、皆さん積極的に真剣に取り組んで下さいました。残り一年余りとなった年祭活動に、ようぼくたる自覚を持って取り組んでいくことをおさづけの取り次ぎを通して共に確かめ合った。

西駿支部

感話

西駿支部では、三日白羽大教会、四日午前益津大教会、午後教務支庁を会場に開催した。独自のプログラムとして天理よろづ相談所病院・公認心理師の宇田まゆみ氏に登壇頂き、

されていることを具体的に話し頂いた。その後の懇談（おしゃべり）タイムでは、参加者が隣り合った人たちと、宇田まゆみ氏の感話を元に、熱心に話し合った。参加者からは、「非常に分かりやすかった」「おたすけに役立つ貴重なお話を聞かせて頂き良かった」等の



白羽会場



益津会場

中遠支部

講話

感想が上がった。

中遠支部では、支部独自の活動を、脚本家の久松真一先生（天理高校、天理大学卒）を講師として迎え、講話が行われた。先生は、道友社勤務を終えた後、脚本家倉本聰氏主宰の脚本家・俳優養成所「富良野塾」で二年修行の後、脚本家としてデビューを果たした経緯や、自身の信仰を深めることとなった同級生へのおたすけの話、教祖百二十年祭時に制作した舞台「扉開いて」の話などを交え、これからは脚本家として「陽気ぐらし」を目指して生きる喜びを伝えるべく「感動与えたい」とお話しいただき、参加者からは感動したとの声が多数聞かれ、それぞれの年祭活動への取り組みにインパクト

を与えるものとなった。



山名会場

西遠支部

講話

西遠支部では東濱名分教会を会場に開催した。今回は、一度に多くの方に受講していただけるよう、神殿参拝場のほか、教職舎の広間に椅子席、

食堂に託児を兼ねた受講会場を設けた。自主プログラムとして、東濱名分教会前会長・鈴木顕太郎先生の講話を拝聴した。お話の要点を、映像にして下さり、熱のこもった先生のお話も、たいへん分かりやすく聴かせていただき、メモを取る方の姿もあった。



東濱名会場

参加者の方に袋詰めのお菓子、お茶を配布した。

北遠支部

DVD鑑賞

北遠支部では鹿玉分教会を会場に開催した。参加者は百三十三名、他、子供八名。開始前の時間に百三十年祭のニュースビデオを上映、支部独自のプログラムではDVD「船乗り卯之助」を上映後、真柱様の祭典講話を拝聴させて頂いた。その後、婦人会による出し物（食品）があった。

第3回ようばく一斉活動日				
参加者集計				
各支部からの報告書による 11月14日現在				
	支部名	会場	開催日	合計
1	東伊豆	伊東	11月3日	44
2		下田	11月4日	24
3	伊豆	西浦	11月3日	34
4		北豆	11月4日	66
5	駿豆	佐野原	11月3日	58
6		嶽東	11月3日	86
7		沼津	11月4日	80
8		楊原	11月3日	56
9	富士	富士	11月3日	77
10	東駿	興津	11月3日	79
11	中駿東	静岡	11月3日	99
12	中駿西	安倍	11月3日	36
13		井川	11月3日	45
14		駿府	11月3日	37
15	西駿	白羽	11月3日	157
16		教務支庁	11月4日	74
17		益津	11月4日	100
18	中遠	山名	11月3日	206
19	西遠	東濱名	11月3日	195
20	北遠	鹿玉	11月4日	141
				1694

秋の叙勲・褒章 鈴木顕太郎氏が藍綬褒章を受章



令和六年の秋の褒章が十一月三日付で発令され、更生保護功績により、鈴木顕太郎氏（東濱名分教会前会長・保護司・教誨師・前教区主事）が藍綬褒章に選出され、去る十一月十三日、法務省での伝達式に臨み、皇居にて天皇陛下に拝謁、同章を受賞されました。氏は平成八年（一九九六年）から保護司を拝命。傾聴を重視し、対象者の不安や緊張をほぐすことを心掛けてこられました。私の基本的スタ

ンスは、対象者の絶対的な信頼者になることです。彼らは、家族、親族、学校、会社、また、警察や少年院、刑務所、拘留所、鑑別所などでいつも怒られてきた人たちです。その人たちに、他の人は信じなくても、私だけはあるなを信じる。でも嘘は嫌いだ。もし万が一、嘘がわかった時は、私は怒るかもしれないよ。それが、私が初めて対象者に初めて会い、面接する時の言葉です」と語っておられます。約束を守ったことを褒めるなどたわいな会話から始め、ホッとできる雰囲気作りに努めた。そして「多くの人たちは、人に怒られ、否定されてきた人達です。人に信じてもらえなかった人たちを信じるのです。もちろん、裏切られることはあります。でも、誰か一人でも自分を信じてくれる人がいたら、どれだけ心強いのか。どんなに心の支えになるか。そう思っって私は対象者と向き合ってきました」と。常に対象者の一番の理解者であることを姿勢で示し、何度裏切られてもその人の心に寄り添おうと努めてこられた三十年。新聞社の取材では、受賞の知らせに「愛情を注いで三十年近く続けた活動が報われた思い」と感慨深げに振り返られ、「いかなるときも笑顔で対象者を迎え入れてくれた家族に感謝しています。少なくとも定年の七十五歳までは全うしたい」と微笑まれたとのことでした。